

吉野祥太郎『Mythology -土地の記憶-』（2024）下山芸術の森 発電所美術館にて公開中（富山県）



表紙の画像は、現在（2024年9月21日～2025年3月16日）富山県の発電所美術館で展開している「Mythology -土地の記憶-」展の一コマである。そこは、かつて水力発電所が存在した場所であり、その記憶を、光の揺らめきを通じて再現する試みである。この展示は、場所が持つ豊かな歴史と、それに伴う人々の記憶、さらには「神話」とも呼ばれる物語の探求となる。

初めてこの場所に足を踏み入れた時、湿度に包まれ、過去の息吹を感じた。それは、豊かな水源がこの地の風景や物語を形作ってきた証であると思像した。生き物が時に死を迎えるのと同様に、自然物やモノにも役割を終える時期がある。これらのモノには、それを使用してきた人や存在していた空間の記憶が染み込んでいるのではないだろうか。私がこの展示を通じて探求したいのは、その記憶の流れであり、消費社会の中で忘れ去られたモノたちが秘める大事なメッセージを引き出すことである。記憶とは、単なる過去の出来事の集まりではなく、現在の自分に影響を与え、未来を形作る重要な要素だ。私たちの内面に眠る記憶は薄れたり消えたりすることもあるが、何かのきっかけで鮮明に蘇ることもある。その瞬間を創出し、観る人が自身の過去を再考する。

展覧会の空間では、光が反射し、さまざまな形で揺れ動く。その様子は、過去の記憶が蘇り、現在との対話が生まれることを象徴している。記憶は時間や場所に縛られず流動的であり、この作品を通じて観る人々がその流れを感じ取ることができればと考えている。会場に設置されたブランコは、単なる遊具ではなく、記憶を再構築するための象徴的な装置として存在している。ブランコに乗ることで、鑑賞者は自身の身体を通じて記憶の流れを感じ、その揺れによって新たな体験を得る。揺れるたびに、周囲の空間も共鳴し、過去の記憶と対話する旅へと誘う。記憶の異次元を行き来するための入口となるのだ。

視覚的な体験を超え、身体や感情に訴えるインタラクションを重視し、ブランコを漕ぐことで、物理的な感覚を得ると同時に、記憶の流動性や多様性を実感してもらいたい。揺れるたびに新たな意味が生まれ、その動きは鑑賞者の内面に深い影響を与える。自身の記憶と向き合うことで、空間に新たな息吹を吹き込み、記憶と場所との繊細な対話が生まれることを目指している。

「Mythology -土地の記憶-」は、土地の記憶と神話を通じて、新たな視点を見つけるための空間である。ここに立つことで、自分の過去の記憶を纏いながら、今という瞬間と出会う。土地が秘めた記憶と再び繋がっていく中で、未知なる自分と場所との関係を見つめ直す旅のようなものである。

吉野祥太郎（よしの・しょうたろう）彫刻家、美術作家 <https://www.sho-y.com/>
本展の特設サイト <https://www.mythology-art.net/>

編集委員より：吉野さんは、一貫して「土地の記憶」をテーマに、石や土、木などの自然物を緻密かつ大胆に構成した大掛かりな野外作品を多く国内外で発表してきた彫刻家・現代美術家です。近年では、光の表現やインタラクティブな要素も取り入れながら、表現を深化させておられます。奇遇なことに、富山大学での本大会の開催と軌を一にして、本年9月から2025年3月まで、富山の発電所美術館（富山県下新川郡入善町下山364-1）で非常に大掛かりな展示をしておられます。それは、時間や死生観にも深く関わっていると感じます。会期中お時間があれば、ぜひお訪ねください。（表紙担当・装丁：岩崎秀雄）